

『宇津保物語』における「奏す」「啓す」の特殊用法（2）

——「奏す」「啓す」「申す」の意味的關係——

柚 木 靖 史

はじめに

「帝」「院」「東宮」「三宮」という限られた対象に対して、〈話す〉という意味を表わす漢語サ変動詞に「奏す」「啓す」がある。『日本国語大辞典』（小学館¹）での説明によると、「奏す」は帝、院を行為の対象とし、「啓す」は、東宮、三宮を行為の対象とするとされる。他の国語辞典、古語辞典での、「奏す」「啓す」の説明も、この説明と大差ない。このように、「奏す」「啓す」は、行為の対象が固定しているがゆえに、絶対敬語とも称されることがある。確かに、『源氏物語』等の平安時代和文資料をみると、国語辞典の記述にあるように、行為の対象が固定されているといえる。しかしながら、『宇津保物語』をみると、「奏す」については、帝や院の他に東宮も行為の対象とする点、「啓す」については、東宮や中宮の他に院を行為の

対象とする点で、「奏す」と「啓す」の間に、行為の対象の重なりが認められる。

そこで、本稿では、『宇津保物語』の「奏す」「啓す」がどのように、意味的に区別されているのか、用例に基づきながら考察することとする。また、帝や院、東宮、三宮を行為の対象とすることのある「申す」についても、考察の対象に加えることとする。

『宇津保物語』の「奏す」と「申す」の意味的關係については、すでに、拙稿²において、論じたところである。ここでは、おおむね以下のことを指摘した。

1 「奏す」の本義は、「政務に関して最終の決定権を持った人物に、公的な行為として申し上げる」である。ここでいう、公的な行為とは、帝、院、東宮を眼前にして、また、周囲にしかるべき上達部がいるなかで、

行われる政務としての行為のことを言う。したがって、「奏す」という行為は、おのずと行為者が藏人などに限定され、場所もおのずと公的な場に限定される。

2 「申す」も帝、院、東宮を対象とすることができ、会話文に使用された例では、話し手が聞き手自身もしくは身内同前として意識し、親しい感情を伴った、私的な会話で使われる。

このように、『宇津保物語』の「奏す」「申す」には、公性の有無ということが、意味の弁別的特徴として設定することができると考えられる。それでは、ここに、「啓す」を加えると、三語の意味的關係はどのようなものか。仮に、「奏す」「啓す」両方に公性を有するという意味特徴が認められた場合、公性の有無という意味特徴だけでは、この三語の意味の違いを説明することは難しい。この意味で、本稿では、拙稿の続編という位置付けで、『宇津保物語』における、これら三語の意味的關係について、考察することとする。

一 院・東宮・後の宮を対象とする「啓す」

—— 院を対象とする「啓す」

まず、「啓す」について、行為の対象が院の例について、用例に基づき考察する。なお、以下の用例の本文は、『新編日本古典文学全集』^③によったが、傍線は私に施した。また、話し手を適宜丸括弧で示したところもある。

1 (朱雀)「いとおほつかなしや。国々のなるべき書どもあなるものを。さなる大事あらむ日は、参らるべきものなり」。(仲忠)「いかが。走り参るべく侍り」。(朱雀)「いかに。習ひつべからむや」。(仲忠)「しか。いととく心得つべく侍り」と啓したまへれば、いとよう笑ませたまひて(後略)(全集3 楼上上 520頁10行目)

1の「啓す」^④は地の文の例である。「啓す」の行為の主体は右大将仲忠で、行為の対象は朱雀院である。朱雀院と仲忠とは、院とその臣下の関係にある。ここでは、朱雀院の「俊蔭娘の琴の奏法を仲忠の子のいぬ宮へ伝授することは順調に進んでいるか」という質問に対し、仲忠が「順調に進んでいる」と回答したという内容である。

このように、ここでの「啓す」には、質問に対する回答であるという意味特徴が設定できそうである。また、「大將、内裏よりも度々召しあれば、参りたまふ。まづ院に参りたまへり」(全集3 520頁9行目)とあるように、院の居所での、臣下から院への行為であるから、公的性を有するという意味特徴も設定できそうである。おそらく、周囲には、殿上人、上達部が控えていたであろう。よって、この例から、まず、質問に対する回答であるという意味特徴と、公的性を有するという意味特徴という二つの意味特徴を設定し、他の「啓す」の例についても、この二つの意味特徴が認められるか否かという視点から、検討していくこととする。なお、ここでの公的性とは、A「行為の対象の眼前で行われる行為である」、B「他の上達部が集まった公の場である」、C「御所内および行幸先といった公の場である」、D「その行為をする資格を有した臣下が行為の主体となる」という条件を全て満たすものとする。以下、これらの条件を、条件A、条件B、条件C、条件Dと呼び、これらの条件が満たされた場合を、公的性を有するという意味特徴が認められるということにする。

2 朱雀院は、大將に、「必ずかの日行かむ。ことごとしからず、なかなか知らぬやうにてもせられよ。騒がしきやうなり。右のおとどの、迎へにもぞとてあると思ふなり」と仰せられけるに、また、嵯峨^{さか}の院、返す返すかたじけなく仰せられしを、しかなど啓し申さむに、人ただ便^{びん}なくいひなしてむ。おのづから聞こえ申して、さらばさりと思はむ。(後略)」(全集3 楼上下567頁1行目)

2の「啓す」は、仲忠の思惟文の例である。行為の主体は右大將仲忠で、行為の対象は朱雀院である。いぬ宮への琴の奏法の伝授が完了し、俊蔭娘といぬ宮が楼から降り、そのときに琴を演奏することになった。朱雀院は、その日に必ず出席したいので、詳しいことを報告するように仲忠に迫る。仲忠は、嵯峨院からも同じことを繰り返して言われており、嵯峨院より前に、俊蔭娘といぬ宮が楼から降りる日の詳細を、朱雀院に公的に告げると、それを知った上達部たちは、朱雀院の行幸は、不都合なことだと反対意見を述べるに違いないというのである。ここでの「啓す」は、俊蔭娘といぬ宮が楼から降りる日の詳細についての朱雀院の質問に対する回答である。した

がつて、質問に対する回答であるという意味特徴が認められる。また、先の条件A―Dを満たしており、公的性を有するという意味特徴も認められる。

3 嵯峨^{さか}の院は、御物語^{みまへ}御前^{みゆか}の御床^{みゆか}の上にて、一院は、清らにうるはしく、そびやかにおはします。御覧^{みらん}じまはして(朱雀院)「人々みな残りなくものするに、内裏^{うち}には誰か候はるらむ」。左のおとど、「大藏卿源朝臣、藏人^{くらんと}の少将宣方^{のふかた}、さては六位の男^{をとこ}どもなむ候ふ」と啓^けしたまふ。(全集3 楼上下 579頁13行目)

3の「啓す」は、地の文の例である。行為の主体は左大臣正頼で、行為の対象は朱雀院である。俊蔭娘のいぬ宮への琴の奏法の伝授が終わり、俊蔭娘といぬ宮は楼から降りることになった。それを見ようと、多くの見物人が集まる。朱雀院も嵯峨院も楼に行幸されている。朱雀院は、内裏に仕える人の多くが見物に来ているのを見て、「誰が内裏に残つて帝に仕えているのか」と、左大臣正頼に尋ねる。これに対して、正頼が「大藏卿源朝臣、藏人の少将宣方、さては六位の男ども」が内裏に残つて仕えていると回答する。

このように、質問に対する回答であるという意味特徴は、ここでの「啓す」にも認められる。また、条件A―Dを満たしており、公的性を有するという意味特徴が認められる。

4 院、「いと小さくてかしこく舞ふものかな、かれここに召し寄せて、楽^{がく}も静かに仕うまつらせよ」とのたまふに、左のおとど、「四人は、この家に侍る童なり」と啓^けしたまへば、「いとをかしく整ひて、いかでかくあるらむ」とのたまふ。(全集3 585頁9行目)

4の「啓す」の行為の主体は左大臣正頼で、行為の対象は朱雀院である。舞を舞った四人の童に対して、朱雀院は、容姿のかわいさ、舞いの見事さを愛で、舞だけではなく楽器も演奏させよと言うのである。その朱雀院の発言に対し、左大臣正頼が「私の邸に住んでいる子供たちです」と、童たちの素性を明かす。正頼の発言は、おそらくは、朱雀院の質問に対する回答であつただろう。ここでは、その詳細な経緯は書かれていないが、朱雀院は、四人の舞の見事を見て、どのような素性の子供たちかと周囲の臣下たちに問うたのであろう。正頼の「四人は、

この家に侍る童なり」という発言は、その質問に対する回答であることとみることができる。よって、質問に対する回答であるという意味特徴を、ここでの「啓す」にも認めてよい。また、条件A→Dを満たしており、公的性を有するという意味特徴も認められる。

5 大将に、(人々)「誰が子ぞ」と問ひたまへれば、(仲忠)「しかじかの者ども、兄弟の子どもに侍り。鄙びて。かくまかでつるなめり」と啓したまふ。(全集3 楼上下 586頁3行目)

5の「啓す」は、地の文の例である。行為の主体は、右大将仲忠で、行為の対象は朱雀院である。列席している殿上人、上達部たちが「誰が子ぞ」と仲忠に質問したのに対して、仲忠が舞の子供たちの素性について回答している。仲忠は、「誰が子ぞ」という質問を、朱雀院の質問でもあると意識して答えたと考えられる。このように考えれば、ここでの「啓す」にも、院の質問に対する回答であるという意味特徴が認められる。また、条件A→Dを満たしており、公的性を有するという意味特徴も認められる。

6 (朱雀院)「大将の朝臣の悦びなどもいひてまし。なほさまさまに、心憂くこそ思ほゆれ。聞こゆることどもは、さ思ほさましや。いかに」とのたまへば、(俊蔭娘)「げにことわりと聞こえさすべき。疎かならぬことをこそ。何とか啓しはべらましか。ことよりほかにと思ひたまへしなむ。まことに、琴はあまた侍りとも覚えはべらぬを。りうかく、ほそをばかりこそ。これは大将折々に聞こしめさせはべるらむものを」と聞こえたまふ。(全集3 楼上下 590頁2行目)

6の「啓す」の行為の主体は俊蔭娘で、行為の対象は朱雀院である。朱雀院は、院の御所に俊蔭娘を呼び寄せ、「聞こゆることどもは、さ思ほさましや。いかに」と、琴の演奏を聞きたいという要求に対して、俊蔭娘がどのように考えるか質問する。朱雀院の質問に対して、俊蔭娘は、慎重に言葉を選びながら、琴の演奏を断わる旨の回答をする。このように、ここでの「啓す」にも、質問に対する回答であるという意味特徴が認められる。また、条件A→Dを満たしており、公的性を有するという意味特徴も認められる。

以上、紙面の都合上、表出順に6例について、例を挙げて、「啓す」の意味特徴について、述べてきた。この他にも、「全集3 楼上下 592頁6行目」「全集3 楼上下 598頁7行目」「全集3 楼上下 599頁15行目」「全集3 楼上下 601頁1行目」「全集3 楼上下 608頁3行目」「全集3 楼上下 611頁10行目」「全集3 楼上下 614頁1行目」「全集3 楼上下 616頁12行目」「全集3 楼上下 618頁8行目」に、院に対する「啓す」の例が認められるが、紙面の都合上、具体例を挙げて説明することを割愛する。ここで説明を省略した例も含めて、院に対する「啓す」にはすべて質問に対する回答であるという意味特徴と、公的性を有するという意味特徴とが認められた。『説文』には、「啓」という漢字に対して、「教也」とあり、「啓」には、「教える」という意味が存することが伺える。「啓す」に、質問に対する回答であるという意味特徴が認められるのは、「啓」という漢字のもつ「教える」という意味に由るのではなからうか。

一―二 東宮を対象とする「啓す」

前節での検討の結果、院に対する「啓す」には、すべてに質問に対する回答であるという意味特徴と、公的性

を有するという意味特徴とが認められた。では、東宮に対する「啓す」についても、同じ意味特徴が認められるかどうかについて検討する。

1 (正頼)「いかなることにかありけむ」。中納言、「一日のついでなどありしかば、『これかれ参りたまへるに、殿の参らせたまはぬがさうぞうしさ』などと、これかれ申したまふついでに、正明、何心なく、『げにあやしく、参りたまはぬは、悩みたまふことやあらむ』と申ししかば、上野かんづけの宮大きにおどろきたまひて、『かの正明の朝臣い、など申したまふことぞ』と声を放ちてのたまふ時に、右大将、兵部卿の宮、あまたこれかれ、いとあやしとおどろきたまふときに、東宮もいとあやしと思はしたるに、この宮、『いといといたいだしきことは、啓し申さざるべき。やむごとなき家の男おとこが前にてだに、かく申しはべりたうべば、まして他の所にて、いかに呪詛ずそ、悪念あくねん深くはべりたうぶらむ。(後略)』(全集1 嵯峨の院 312頁9行目)

1の「啓す」の行為の主体は、中納言正明で、行為の対象は、東宮である。周囲の人々が、「これかれ参りた

まへるに、殿の参らせたまはぬがさうざうしさ」と、正頼の不在を残念がつているなか、中納言正明が「げにあやしく、参りたまはぬは、悩みたまふことやあらむ」と述べたことに對して、上野の宮が、正明の発言が呪詛にあたると言いがかりをつける。ここで、東宮は、正明に、正頼の不参の理由について質問しているわけではないから、中納言の発言は、東宮の質問への回答ではない。よつて、ここでの「啓す」には、質問に対する回答であるという意味特徴は認められない。ただし、条件A～Dを満たしているので、公的性を有するという意味特徴は認められる。

ここでの「啓す」に、質問に対する回答であるという意味特徴が認められないのはなぜであろうか。結論から言えば、この「啓す」は、上野の宮が発言をことさらおおげさにするために使った、本来の「啓す」の意味からは外れた、特殊な用法ではないかと考える。

この場面の「啓す」は、正明から正頼への会話のなかで、上野の宮の話を引用したなかで使用されたものである。上野の宮は、「藤原の君」巻（全集1 153頁1行目）では「古親王」と表記され、「ものひがみたまへる親王にておはしける」とある。あて宮への求婚者の一人で、謀

計により、あて宮を手に入れようとし、失敗した人物である。上野の宮は、老人で、ひねくれた性格の人物として記されており、この点で、周囲からは好意的には見られない人物であった。この場面も、中納言の言葉を、大げさに曲解して捉え、東宮をはじめ、周囲の人々から不審がられる。

「これかれ申したまふついでに」と「申す」で表現してあるように、正明は、自らの発言を、「啓す」という行為に当たらないと捉えている。また、正明は、列席する上達部たちの発言を、「申したまふ」と表現し、また、自分の発言を「申ししかば」と表現している。これは、正明が、自らの発言が「啓す」という行為に当たらないと考えていたためであろう。その「申す」にあたる行為を、上野の宮は「啓す」という行為をしたとして、言いがかりをつけたのである。

また、上野の宮自身も、自らの発言のなかで、中納言の発言を、「など申したまふ」「啓し申さざるべき」「かく申しはべりたうぶらむ」のように、「啓す」と「申す」を併用している。これら、上野の宮の使う「啓す」「申す」に、使い分けがあるようにはみられない。ここに、上野の宮の、「ものひがみたまへる親王」という性質が、言葉

遣いの上で表出されている。

このように考えると、ここでの「啓す」は、その本来の使い方ではないといえよう。上野の宮は、言いがかりをつけるために、それをあえて「啓す」で表現したのである。したがって、ここでの「啓す」は、上野の宮の誤用であるといえる。この「啓す」に、他の「啓す」のような質問に対する回答であるという意味特徴が認められないのは、この「啓す」が、本来「啓す」を使うべきところではないところで、上野の宮が、中納言を貶め、自らをあて宮の婿であるとして誇示しようとして使われたためであろう。

2 (正頼)「おほなおほな。夜のほどもに参りて、ただにやは、顕澄啓せよ。宮の亮なれば、藏人ならずとも」
とのたまへど、(顕澄)「何か。御気色よろしからぬにこそ」とて申したまはねば、(全集2 蔵開下 560頁7行目)

2の「啓す」は、会話文で使われた例である。話し手は右大臣源正頼で、聞き手は宮の亮顕澄である。行為の主体は顕澄で、行為の対象は東宮である。

ここでは、「宮の亮なれば、藏人ならずとも」とあり、公的性の条件D、すなわち行為の主体としての資格が示されている。東宮の眼前で(条件A)、他の上達部の列席のもと(条件B)、東宮御所という公的な場所(条件C)での行為と考えられるので、ここでの「啓す」には公性を有するという意味特徴が認められる。

一方、質問に対する回答であるという意味特徴が認められるかどうかについては、ここで「啓せよ」と命令表現になっていることから分かるように、まだ「啓す」という行為が行われていないので、判断することができない。ただし、顕澄が東宮と面会し、例えば「藤壺の退出についてはどうか」といったような質問を東宮から受け、それに答えて「藤壺の里下がり希望する」という形式をとることを想定して、正頼は「啓す」を使ったとみることは可能である。したがって、ここでの「啓す」に、質問に対する回答であるという意味特徴を認めることは可能であろう。

3 藏人、「いかがしはべらむ。やがて参らずや侍るべき。参りてかかるよしをや啓しはべるべき」。上、「ただ参りて、御返りも聞こえずと、乳母たちして申させよ」

とのたまへば、泣く泣く参りて、さ啓せさす。(全集3
国譲中 245頁3行目)

3には、二例の「啓す」が認められる。一例目の「啓す」の行為の主体は蔵人これはたで、行為の対象は、東宮である。蔵人これはたは、藤壺の乳母の子どもで、藤壺が帝に対して蔵人に推挙した人物である。里下がりしている藤壺に対して、東宮は音信不通の状態にあることを打開すべく、蔵人これはたに文を託し、藤壺からの返信を必ず持参して帰るように命ずる。これはたは、藤壺のところに参り、東宮の文を渡すが、藤壺はなお、東宮の命に応じようとはしない。

蔵人は東宮に命じられて、藤壺のもとに参上した。したがって、その結果の報告は、東宮からの「藤壺の回答はどうであったか」という質問を受けて行われるであろうから、一例目の「啓す」に、質問に対する回答であるという意味特徴は認められる。また、ここでの「啓す」は、条件Aから条件Dを満たし、公的な場で行われる蔵人の行為であるから、公的性を有するという意味特徴が認められる。

二例目の「啓す」は、使役表現なので、行為の主体は

これはたとは異なる人物で、行為の対象は東宮である。ここで「啓せさす」と使役表現が使われているのは、「これ、前々のやうにならば、さらにな参りそ。候はせじ」(全集3 243頁15行目)と東宮から言われている以上、これはたは東宮に会えないので、これはたは「啓す」という行為を他の人物に託したのである。ここでいう他の人物とは誰なのかについては、本文に記されておらず定かではないが、東宮に直接会って「啓す」という行為を行う資格を有した人物であることは明らかであり、よって、条件Aから条件Dを満たしており、二例目の「啓す」にも公的性を有するという意味特徴が認められる。また、質問に対する回答であるという意味特徴も、一例目の「啓す」と同じように、二例目の「啓す」にも認められる。

なお、3の例で、東宮を行為の対象とするにもかかわらず、「乳母たちして申させよ」のように、「啓す」ではなく「申す」が使われていることに注目しておきたい。乳母では、行為の主体としての資格がないため、ここでは「申す」が使われていると考えられる。

以上、見てきたように、東宮に対する「啓す」にも、公的性を有するという意味特徴と質問に対する回答であるという意味特徴とが認められるといつてよい。

一―三 后宫を対象とする「啓す」

ここでは、后宫に対して使われた「啓す」を取り上げる。ここでの后宫は、朱雀帝の後であり、東宮の母である。中宮でもあるので、「啓す」の対象となり得る人物である。

1 太政大臣、「なほ、これは私事なり。なほ、侍ること

とを、かうなむと申さるるなめり。妻を思はぬ人なれど、ことの道理のあることなり、かくは心をとなへてなむ、え申すまじく侍る。なほただ啓するやうに、御子の君に、あるべきやうを、よからむ折、こしらへ聞こえたまへ」

(全集3 国譲下 257頁14行目)

1の例の「啓す」の行為の主体は忠雅で、行為の対象は后宮である。藤原一族の梨壺腹の子を皇太子にすること画策する后宮は、兄の藤原忠雅に協力するように訴える。后宮は、「この御身の筋を思ほし捨てて、来し方行く先、またこの筋の恥とある大いなることをとどめたまへ」(全集3 252頁15行目)のように、藤原氏一族側の立太子を、兄達に相談する。これに対して、忠雅らは、「忠雅らは、ともかくもいかでか。臣下といふものは、君の若くおはします、御心の疎かにおはします時こそ侍れ、かく

明王のごとおはします世には、何ごとをかは定めまうす。」

(全集3 253頁8行目)と、后宮への協力に否定的な回答をする。「この御身の筋を思ほし捨てて、来し方行く先、またこの筋の恥とある大いなることをとどめたまへ」(全集3 252頁15行目)という后宮の発言は、忠雅らへの依頼・命令表現であるが、忠雅らへ賛同の意志を問うという内容も兼ね備えている。このように考えると、ここでの「啓す」には、質問に対する回答であるという意味特徴が認められることとなる。

次に、ここでの「啓す」に、公的性を有するという意味特徴が認められるかどうかというについて確認する。

后宮は兄弟たちを自らの居所である朱雀院に迎え入れ、「御前の人みな立てさせたまひて、請じ入れたてまつりたまひて、太政大臣に聞こえさせたまふ」(全集3 251頁12行目)という行為をとる。御前の女房を退かせたのは、秘密の相談であったからであろう。この行為からは、一族だけで内密に私的な会話を行おうという后宮の意図がうかがわれる。これに対して、太政大臣は、「とみに、ものものたまはず」(全集3 253頁5行目)、「しばし思はしためらひて」(全集3 253頁8行目)とあるように、一貫して慎重な行動をとる。太政大臣は、「公卿、大臣、定め

まうしはべりなむ。近うは、娘のことなれど、ここにこそは。まづかかることは下よりなむ。いかなるべきことぞ、男ども」(全集3 254頁9行目)とあるように、自分たちを、ここに列席していない殿上人、上達部らの一人として考えている。また、下の身分のものから意見をいうべきだとし、兼雅の子息である、宰相直正や大納言忠俊にまず意見を求め、さらに右大臣兼雅にも直接に意見を求める。この太政大臣の詮議の進め方は、兄弟の関係を意識したというよりは、お互いの役職者としての身分的関係を重視した公的な行為である。

このように、ここでの「啓す」という行為は、一族の間だけの画策として、私的に物事を進めようとする后宮に対して、一族に災いが降りかからないように公的に会話を進めるべきだという、太政大臣の、自らの役職を考慮した、大局的な見地に基づいた、冷静かつ慎重な態度が認められる。

今まで述べてきたことを整理すると、公性の判定のための条件からみると、后宮の眼前という条件Aを満たし、また行為の主体は太政大臣であるから、「啓す」という行為を行う資格を有するという条件Dをも満たしている。また、朱雀院の御所という公の場所であるから条件Cを

満たしている。忠雅たちが、后宮の兄であり、一族であるという意識であれば、他の上達部らが列席した公的な場であるという条件Bを満たさないが、先に述べたように、忠雅は自らを太政大臣という役職として意識し、列席している兄弟たちを、身内としてではなく、役職者として意識し、他の列席していない上達部らに代わる人物たちとして処遇している。このように考えると、ここでの「啓す」は、条件Aから条件Dを満たしており、公性を有するという意味特徴が認められると考えられる。

以上みてきたように、后の宮に対する「啓す」にも、質問に対する回答であるという意味特徴と公性を有するという意味特徴とが認められる。

二 院や東宮を対象とする「奏す」

前節では、「啓す」の意味について、質問に対する回答であるという意味特徴と公性を有する意味特徴とが認められることを述べた。ここでは、「啓す」と「奏す」の意味の違いについて検討するために、「奏す」にも先の二つの意味特徴が認められるかどうかについて検討する。

二― 院を対象とする「奏す」

まず、院に対して使われた「奏す」について検討する。

1 おとど、「年ごろをばさるものにて、今日のため明日心細きこと。嵯峨の院にも、折あらば今かくなむと奏せむ。常に、『昔深き契りある仲なりき。正頼ばかりぞ聞き出でむ』とかしこく悲しびたまふを、かくなむと聞こし召さば、いかに悲しみのたまはむ」（全集1 春日詣 276頁1行目）

2 仲頼、「いと興あることかな。かの侍従と等しき人のまたあるよ。神南備の藏人の腹に生れたまふと聞きし君ぞかし。ただ今の中に、めづらしき人生^おひ出でたまふなんど、紀伊守の院に奏せし君にこそあれ。いかでさは生ひ出でたまふらむ。忍びてこれかれ行かばや。藤侍従は御暇^{いとま}ぞなかめる。良佐^{うすけ}ぬしなどしてもものせむ。」（全集1 春日詣 382頁6行目）

3 a b c 帝、「年の内、本草の盛り、秋のほどにいつか」と問はせたまふ。藏人の少将仲頼奏^aす。「野の盛りは八月中の十日、山の盛りは九月上^{かみ}の十日のほどになむ」「野山の中には、いづれかおもしろき」。仲頼奏^bす、「近きほどには、嵯峨野、春日野、山は小倉山、嵐山な

む侍る。草木などには、心生ひに生ひたるはつたなきものなり。人近^{ぢか}にて朝夕^{あした}べ撫でつくろひたるなむ、姿、有様情け侍る。花紅葉などは、しか侍らぬものなり」と奏^cす。（全集1 513頁6行目）

4 上、「かの鷹を試みばや。入り所のをかしからむ、思ひ出でよや」。「仲頼が見たまふるは、先に奏^しはべりし紀伊国なむ侍る。十六の大国にも、さばかりの所やは侍らむ。」（全集1 514頁8行目）

5 a b 上、「そや、さることぞや。いとゆかしけれ。たれかれもしか奏^aせしかど、いかでかはかしこまではものせむ。いと所狭^せきうちに、例なきことにもこそ」とのたまはすれば、右のおとど、「なか、そはおはしまさざらむ。唐^{から}の国の帝は、遠狩^{とほがり}したまふとは、十、二十日こそは。四、五日のほどは、いとよくおはしましなむ」と奏^bしたまへば、（全集1 514頁10行目）

6 その日のつとめて、はかず奏^せさせて、源氏参らせたまふ。菊につけたりける歌、

朝露に盛りの菊を折りて見るかざしよりこそ御世もまさらめ

帝御覧じて、いと切なりと思したり。（全集1 517頁14行目）

7 「この人見しやうなれば、あはれなるを、一人なむ思ひ出でたる。昔契られたる仲なれば、見知られたらむとなむ思ふ」。大将、悲しと思してえ奏したまはず。(全集1 523頁14行目)

8 a b c d 大将、「この法師見たまへつけしはじめより、奏せむと思ひたまへしかど、世に侍りけると聞こし召されじと、限りなく恥ぢかしこまりはべりしかば、今に奏せ^bず侍りつる」。帝、限りなくあはれと思し召して、御階に召し寄せて、「年ごろ今にいたるまで、隠れにしを思はぬ時なし。あやしくはかなくて失せにしは、いかなることにてぞ」など問はせたまふ。山伏、紅の涙を流して奏す^c。「山にまかり籠りしは、父、剣をもちて殺害すとも、汝が罪をば咎めじとまで申しはべりしを、かの朝臣^{いたは}労るところありて参らずはべりしころ、許されぬ暇^{いとま}を奏してまかり出でてはべりしに、(後略)」と奏す。(全集1 524頁6行目)

他にも、「用例9 全集1 522頁10行目」「用例10 a 全集1 536頁10行目」「用例10 b 全集1 537頁4行目」「用例11 全集3 381頁8行目」「用例12 全集3 461頁14行目」「用例13 全集3 465頁11行目」に、院を対象とする

「奏す」の例があるが、紙面の都合上、ここでは用例の掲載を割愛する。

まず、これらの例の「奏す」に、公的性を有するという意味特徴が認められるかどうかを確認する。

これらの例の「奏す」が、公的性の条件AからDを満たしているかどうかを論文末の表1にまとめた。この表に示すように、すべての例の「奏す」が、条件を満たしていることから、「奏す」に、公的性を有するという意味特徴が認められる。したがって、公的性を有するという意味特徴は、「奏す」と「啓す」の、弁別的な意味特徴にはならないと考えられる。なお、本文中で記載がない事柄に関しては、条件に合致させて矛盾しないものは「○」として扱った。

次に、質問に対する回答であるという意味特徴が「奏す」にも認められるかどうかというについて検討する。

1の例の「奏す」は、正頼が忠こそに会ったことを院に報告するという内容であるから、院からの質問に答える行為ではない。したがって、質問に対する回答であるという意味特徴は認められない。

2の例の「奏す」は、嵯峨の院と女藏人との間の子である源涼の成長についての院への報告であって、院から

の質問に答える行為ではない。したがって、質問に対する回答であるという意味特徴は認められない。

3aの例の「奏す」で伝える内容は、「秋のほどにいつか」「問はせたまふ」とあるように、嵯峨院からの、秋の季節で草木の見ごろの時期を教えよという問いに対しての仲頼の答えである。また、3b cの例の「奏す」で伝える内容は、「いづれかおもしろき」とあるように、嵯峨院からの、野山のなかではどこが面白いかという問いに対しての仲頼の答えである。よって、これらの「奏す」には、質問に対する回答であるという意味特徴が認められる。

4の例の「奏す」は、かつて仲頼が仲忠らと訪れた紀伊国についての院への報告であって、院からの質問に答える行為ではない。したがって、質問に対する回答であるという意味特徴は認められない。

5aの例の「奏す」は、吹上がすばらしいところであるという内容の報告であって、院からの質問に答える行為ではない。したがって、質問に対する回答であるという意味特徴は認められない。5bの例の「奏す」は、唐の国の帝の、鷹狩の例についての内容である。嵯峨院が、紀伊国への鷹狩について、公の身で長く留守が出来ないこと、前例のないことを理由に紀伊国への鷹狩をた

めらうが、忠雅は、唐の国の例を挙げて、紀伊国への鷹狩について、問題ないと説明する。この発言の前には、院の「そや、さることぞや。いとゆかしけれ。たれかれも奏せしかど、いかでかはかしこまではものせむ。いと所狭きうちに、例なきことにもこそ」という発言があるが、これは院の述懐であって、質問ではないと考えられる。したがって、ここでの「奏す」には、質問に対する回答であるという意味特徴は認められない。

6の例の「奏す」で伝えられる内容は、菊の葉の数である。ここでの「奏す」には、質問に対する回答であるという意味特徴は、認められない。

7の例の「奏す」で伝える内容は、目の前に現れた法師がかつて嵯峨院に仕えていた忠こそであるというものである。しかし、実際には、「え奏したまはず」とあるように、正頼は、忠こそその心情を察して、何も奏上できなかった。この前の、正頼への院の発言は、「昔契られたる仲なれば、見知られたらむとなむ思ふ」である。これは、「眼前にいるのは誰であるか」という内容の質問ではなく、院みずからの思いをそれとなく披歴したにすぎないと考えられる。したがって、ここでの「奏す」には、質問に対する回答であるという意味特徴は、認められないと考

えられる。

8 a b の例の「奏す」で伝えられる内容は、吹上御所を訪ねてきた法師が忠こそだといふことの報告である。正頼は、吹上御所に法師が訪ねてきた当初から、それが忠こそであると分かっていたが、忠こそが恥ずかしがつているという心中を察して、すぐには院に伝えなかつたのである。ここでは、このように正頼が思う前に、院からの質問があつたわけではない。したがって、ここでの「奏す」には、質問に対する回答であるという意味特徴は、認められない。8 c d の例の「奏す」で伝えられる内容は、忠こそが宮中を去り、遁世した理由である。ここでは、忠こそその発言の前に、「問はせたまふ」とあるように、院からの質問がある。したがって、ここでの「奏す」には、質問に対する回答であるという意味特徴が認められる。

なお、ここで、紙面の都合上、用例を掲載していない例については、「全集1 522頁10行目」は、質問に対する回答であるという意味特徴が認められない、「全集1 536頁10行目」は、質問に対する回答であるという意味特徴が認められる、「全集1 537頁4行目」は、質問に対する回答であるという意味特徴が認められる、「全集3 381頁8行目」は、質問に対する回答であるという意味特徴が

認められない、「全集3 461頁14行目」は、質問に対する回答であるという意味特徴が認められる、「全集3 465頁11行目」は、質問に対する回答であるという意味特徴が認められないという結果であつた。

以上、院に対する「奏す」について、質問に対する回答であるという意味特徴が認められるかどうかという観点から、用例ごとに検討してきた。その結果、「奏す」には、この意味特徴が認められる例もあれば、認められない例もあるということになった。したがって、質問に対する回答であるという意味特徴は、「奏す」の全例を被う意味特徴ではないと結論づけられる。この点に、「啓す」との意味の違いを認めてよいであらう。

ただし、「奏す」にも、質問に対する回答として使われる例があることは、無視できない。そこで、質問に対する回答として使われる場合の「啓す」と「奏す」の間になにか、意味的相違が認められるかについて、確認しておきたい。

院の質問内容を、「啓す」と「奏す」とで比較してみると、次に示すように「啓す」は身内に関する質問であるのに対して、「奏す」は身内を超えた公的な質問であるという違いが認められた。

まず、「啓す」の質問内容は、次のように、孫や子、尚侍といった、身内のことが対象で、政治に関することが対象ではない。

- 1 孫であるいぬ宮の琴の習得の様子がどのようなものであるかについて
 - 2 孫であるいぬ宮がいつどのように楼から降りてくるかということについて
 - 3 わが子である帝に現時点で誰が伺候しているかということについて
 - 4 舞を舞った子供たちに楽器を演奏させること（子供たちを身内に迎えようとしている。）
 - 5 舞を舞った子供たちの素性について（子供たちを身内に迎えようとしている。）
 - 6 尚侍であった俊蔭娘の心中がどのようなものであるかということについて
- 番号1から6は、「一一」の用例番号と対応する。その他にも「わが子の夫である仲忠が、大臣への昇進の宣旨を受けるかどうか」「孫である俊蔭を中納言にするという宣旨がくだったかどうか」「尚侍であった俊蔭娘が琴をどのように演奏したか」といった質問内容がある。

一方、「奏す」の質問内容は、次のように、身内のこと

ではなく、政治に関することが中心である。

- 3 a 秋の季節で草木の見ごろの時期はいつがよいのか。
- 3 b c 野山の中ではどこが面白いのか。
- 8 c d 忠こそ通世がどのような理由であるものであったのか。
- 10 a b 源涼の琴の奏法の伝授の由来がどのようなものであったのか。
- 12 仲忠が建てている京極殿の楼の目的が何であるのか。

3 a b c の質問は、嵯峨院みずからが行う鷹狩りに適した時期や場所を臣下に質問するという内容で、政治的な事柄である。8 c d の質問は、嵯峨院が忠こそに対して忠こそ失踪の理由をたずねるものである。忠こそと嵯峨院は身内同士の関係にはないので、この質問も身内に関する内容ではない。臣下の動向であるから、政治的な内容である。10 a b の質問は、吹上で出会った源涼に、琴の奏法の伝授がどのような経緯で行われたのかということに問い糾すものである。この源涼のことについて、父親である嵯峨の院が、どれほど、その素性を知っている

かということについては判然としない。「その腹によき娘一人ありければ、うちの藏人仕うまつりけるが腹に、源氏一とこる生まれたまひけり。母生み置きて隠れぬ。帝

知らしまさず、母奏せずなりにけり」(全集1 377頁9行目)

とあるように、嵯峨院は、自らの子である源涼の存在を知らなかったとある。また、松方は仲頼に、「神南備の藏人の腹に生れたまふと聞きし君ぞかし。ただ今の中に、めづらしき人生ひ出でたまふなんと、紀伊守の院に奏せし君にこそあれ。」(全集1 382頁7行目)とあり、育ての親の紀伊守が嵯峨院に報告したとあるが、その素性まで伝えたかどうかは判然としない。このようにみると、ここでの会話において、嵯峨院が源涼をわが子であると認識していたとは考えられない。内容は、丹比弥行というすぐれた琴の奏者の失踪を問うもので、政治的な内容である。12の質問は、京極殿の樓の建立の目的についてである。仲忠は、朱雀院の子、女一の宮の夫である。したがって、仲忠が行う行為に関する質問であるから、身内に関する質問のようにも解することができる。しかし、ここでは、臣下が行っている樓の建築の目的を公に問いたいという目的で質問したのであって、身内に関する事柄についての質問ではないと考えられる。臣下

が行う、邸宅の増築に関しては、政治的関心事であったであろう。

このように、質問に対する回答である「奏す」の例と「啓す」の例を、その質問内容の点から比べてみると、「奏す」と「啓す」とでは、その伝えられる内容に違いがあることが分かる。つまり、「奏す」は、政治的な事柄が伝えられることが多く、「啓す」は、身内の状況についての私的な事柄が伝えられることが多いと結論づけられるのである。「奏す」「啓す」どちらも公的性を有するという意味特徴を有するのであるが、伝える話の内容については、「奏す」の方がより公的性が強いということもできよう。

二二 東宮を対象とする「奏す」

ここでは、東宮に対して使われた「奏す」の例を挙げる。

1 かくて、夜深くなりて、東宮、御あそびなどしたまふついでに、「ここにものせらるる中に、こともなき娘、たれ多くものせらるらむ。賭物にして、娘くらべなどせられや」(中略) 源中納言奏したまふ。「左大将の朝臣こそ女子あまた持たまひてはべるなれ。あやしき

娘の苑にこそあれ。天の下の人、集へられ果てぬ、と見たまふれど、なほまた多く侍なり。」(全集2 菊の宴 19頁8行目)

2 「何か、そは。罪あらば、奏せさすばかりにこそはあなれ。な思しわづらひそ」。大将、「さらば。仰せ言に従はむ」など奏したまふを、(全集2 菊の宴 22頁7行目)

3 後の宮、「さる者しもぞ、神仏は欲しうしたまひしかな」とのたまへば、おとどたち、「よきこと聞きはべれど、えなむ、この中には定めはべらぬ。なほ申しつるやうに奏せさせたまへ」とて、みなまかでたまひぬ。

(全集3 国譲下 259頁15行目)

1の「奏す」の行為の主体は源中納言で、行為の対象は東宮である。この場面は、残菊の宴で東宮が賭物にして、娘比べをするところである。源中納言は東宮に、左大将正頼には娘が多く、そのうち何人かは、天下の優れた人物を婿にしているが、まだ残っている中にもよい娘がいることを進言する。ここでの「奏す」は、東宮の眼前で行われた行為であり、また、「親王たち、上達部参りたまふ」(全集2 19頁5行目)とあるように、多

くの上達部たちが列席したなかでの行為(条件A、条件B)である。場所は、宮中という公の場で(条件C)で、行為の主体は中納言であるから、「奏す」という行為をすることが出来る資格を有した人物である(条件D)。よって、1の「奏す」には、公的性を有するという意味特徴が認められる。また、「ここにものせらるる中に、こともなき娘、たれ多くものせらるらむ」とあるように、東宮の質問に対する回答であるから、質問に対する回答という意味特徴も認められる。なお、この質問は、東宮の女御の選出に関わる政治的に重大な内容である。

2は、1に続く場面で、「奏す」の行為の主体は正頼で、行為の対象は東宮である。公的性の条件Aから条件Dを満たしており、この例の「奏す」には公的性を有するという意味特徴が認められる。正頼の第九の娘あて宮の入内を願う東宮に対して、あて宮は源涼と結婚させよという帝との約束に違ふことになるというが、東宮は、帝からの処罰は覚悟の上であるから、ぜひあて宮を東宮女御として入内させたいと言う。これに対して、左大将正頼は、「さらば。仰せ言に従はむ」と、東宮に「奏したまふ」のである。ここでの正頼の発言は、東宮からの質問を受けた発言ではなく、正頼の娘あて宮を入内させたいという

東宮の要請を受けて、正頼が承知の意を示したものである。よって、ここでの「奏す」には、質問に対する回答であるという意味特徴は認められない。

用例3の「奏す」の行為の主体は藏人のような東宮の側に仕える人物で、行為の対象は東宮である。ここでの「奏す」の行為は、「奏せさせたまへ」とあるように、未だ行われていない。しかしながら、東宮の眼前で（条件A）、多くの上達部たちが列席したなかでの行為（条件B）ということが想定できる。場所は、東宮御所という公の場で（条件C）の、藏人の行為（条件D）であろう。このように考えると、ここでの「奏す」にも公的性を有する行為であるという意味特徴が認められる。

ただし、ここでの「奏す」という行為は、東宮からの質問に対する回答ではなく、后宮の考えを一方的に伝える内容であると考えられるので、質問に対する回答であるという意味特徴については認められない。

以上、東宮に対する「奏す」には、すべての例に公的性を有するという意味特徴が認められるが、質問に対する回答であるという意味特徴は認めらる例と認められない例とがある。これは、院に対する「奏す」の特徴と同じである。

三 院や東宮を対象とする「申す」

三― 院を対象とする「申す」

院を対象とする「奏す」「啓す」には、いずれにも公的性を有するという意味特徴が認められた。「申す」には、公的性を有するという意味特徴が認められるのであろうか。

まず、会話文中の「申す」の例について取り上げる。

1 院の帝もおはしましぬ。世の中の物の上手ども、みな参り集まりて、文人も選ばれたる限り参る。帝御物語のついでに「あやしくこの世にめづらしき所ありと、これかれ申ししかば、見たまへむとてもものせしを、この涼が待る所になむ侍りける」（全集1 吹上下 527頁15行目）

1の「申す」の行為の主体は、「これかれ」、すなわち宮人たちで、行為の対象は、嵯峨院である。「これかれ」とは、吹上邸を訪れた仲頼や仲忠や行政らである。院に伝えた内容は、吹上邸がすばらしいところであったという報告である。ここでの「申す」は、院の御所において、

院の眼前で臣下から院に伝えられる行為であるから、条件Aから条件Dを満たしており、公的性を有するという意味特徴が認められる。ただし、公的性を有するという意味特徴が認められるというのは、この院に対する「申す」のような例に限つてのことで、全ての「申す」の例に、公的性を有するという意味特徴が認められるわけではない。

また、ここでは嵯峨院の質問に対する回答ではないので、質問に対する回答であるという意味特徴は、認められない。

さて、この1の例に関連して、2の「奏す」の例を挙げる。

2 上、「そや、さることぞや。いとゆかしけれ。たれもかれもしか奏せしかど、いかでかはかしこまではものせむ。いと所狭きうちに、例なきことにもこそ」とのたまはすれば、(全集1 吹上下 514頁10行目)

2の「奏す」の行為の主体は「たれもかれも」とある。この「たれもかれも」とは、1と同じく、吹上邸を訪れた仲頼や仲忠や行政らである。行為の対象は、嵯峨院で

ある。院に伝えた内容も、1の「申す」と同じく、吹上邸のすばらしさについてである。ここでの「奏す」も、条件Aから条件Dを満たしており、公的性を有するという意味特徴が認められる。また、1の「申す」と同じく、質問に対する回答であるという意味特徴は、ここでの「奏す」には、認められない。

このように、ほぼ同内容の場面で、1のように、一方では「申す」が使われ、他方では2のように「奏す」が使われているのはなぜであろうか。

ここで、注目したいのは、「帝御物語のついでに」とあるように、1の例の、「申す」が使われた場面が、嵯峨院が朱雀帝と親しく話をしていくついでにかわされた、嵯峨院から朱雀帝への会話文のなかで使われているということである。これに対して、2の「奏す」は、嵯峨院が仲頼と会話しているなかで使われている。嵯峨院と朱雀帝、嵯峨院と仲頼とは、話し手と聞き手との関係において、身分上、大きな差が認められる。すなわち、1は、親しく打ちとけた話ができる話し手と聞き手であるのに対して、2は、院と臣下という、身分的にかけ離れた話し手と聞き手の会話であって、そこには親しさといった要素は入り込む余地がない。すなわち、公的性の強い会

話である。1で「申す」が使われ、2で「奏す」が使われた背景には、話し手の聞き手に対する意識にもとづく、会話の持ち掛け方の違いがあるのではないかと考える。

このように捉えることができるのであれば、「申す」には、会話の中で、聞き手との関係により、話の内容を和らげるという働きを見て取ることができるのである。まさしく、漢語の堅苦しさと同語の和やかさという特質の差を、ここでの「奏す」と「申す」の使われ方にも、見出すことができるのである。

以下、院に対する「申す」に、話し手が聞き手に対して、親しく和やかに話を持ちかけようとする意識が認められるかどうか、会話文中に使用された「申す」の例について簡単に検討していきたい。

3 (嵯峨院)「この宴にも、ありしにもせじ。公卿たちに役仕うまつらせむ。右大弁季英の朝臣に、判仕うまつらせむ。右大將の朝臣には、講師仕うまつらせむ」。朱雀院、「いと興あり。朝臣は詩講師することをなむ申しはべる」。(全集3 国譲下 388頁15行目)

4 (仲忠)「いと弾かまほしうものしたまふを、いかがとのみ思ひたまふる。朝廷にも、院にも、御気色賜は

りて、暇申して、よろづを捨てて、静かに籠りはべりて、かたじけなくとも、おはしませて、おぼつかなき所々も承りてとなむ、夜昼嘆き思ひたまふる」。(全集3 楼の上上 448頁10行目)

5 大將、宮に、「(中略)生まれたまひし時よりだに、いかならむと安からず、人々はものしたまひしを、殊なることなくては、公事をものせず侍らむとて、院の暇申しはべりしを、来む月よりとなむ思ひはべる」。(全集3 楼の上上 479頁5行目)

6 (仲忠)「よく侍なり。有様に従ひて取りまうさせはべらむ。暇の賜びがたき、院にせちに申し賜はりたる。今はおよすげたまはねば、夜もさるべくは。かかる折はいかが、となむ思ひたまふる」と申したまへば、(全集3 楼の上上 502頁6行目)

7 院の宮たち、あるは、「上に申さむ」などのたまふ。院の上、いづれともなく、うつくしと見たてまつりたまふ。(全集3 楼の上下 588頁2行目)

3の「申す」の行為の主体は、右大將仲忠で、行為の対象は朱雀院である。話し手は朱雀院で、聞き手は、その子である今上帝や、父である嵯峨院である。

4の「申す」の行為の主体は、仲忠で、行為の対象は帝や朱雀院である。話し手は、右大将仲忠で、聞き手は、母である俊蔭娘である。

5の「申す」の行為の主体は、右大将仲忠で、行為の対象は朱雀院である。話し手は、仲忠で、聞き手は、その妻である女一の宮である。

6の「申す」の行為の主体は、仲忠で、行為の対象は朱雀院である。話し手は、右大将仲忠で、聞き手は、その父右大臣兼雅である。

7の「申す」の行為の主体は、朱雀院の子供である宮たちである。行為の対象は、父の朱雀院である。宮たちの間での会話である。

このように、院に対して、会話文のなかで「申す」が使われた例は、すべて、話し手と聞き手の会話は、父と子、夫と妻といった身内同士の関係である。そこには、話し手が聞き手に対して、親しく和やかに話を持ちかけようとする意識を認めることができる。

次に、地の文で使用された、院に対する「申す」について検討する。

8 源中納言、嵯峨さかの院へ参りたまひて、「乱みだり脚病かくびやうい

たはりはべるとて、石山などに詣まうではべりとてなむ」と、御物語申したまひて、（全集3 楼の上下 565頁1行目）

右の例の「申す」の行為の主体は、中納言源涼で、行為の対象は、嵯峨院である。源涼と嵯峨院は、親子の関係にある。ここでは、その二人が、「話」を親しく交わしていることを、「申す」で表現している。なお、「御物語奏す」「御物語啓す」という表現は、『宇津保物語』には、一例も見出せない。「物語」という親しい会話と、「奏す」「啓す」という公的な意味とがつりあわないためであろう。

9 （俊蔭娘）「いとあやしく。さらにめづらかなるさまの侍らぬを、あいなう侍るに、左のおとどの春日詣かすがなど、みな聞き馴らしたるなむ侍らむ。大将に仰せ言を」と申したまへば、いとよくうち笑はせたまひて、（全集 楼の上下 601頁6行目）

10 万両の黄金こがねも悪わるく思おもひて、嵯峨さかの院に、「世を去りはべりて、今宵こよひの禄をこそ、え心のままに侍るまじけれ」と申したまへば、（全集3 楼の上下 610頁4行目）

11 （嵯峨院）「この返しには、民部卿を、あまたの人望

み申すなるを、この朝臣を必ずなさせたまへ、と奏せさせたまへ。これのみこそ、古人のとまりたるはあれ。いとあはれなり。」と申したまふ。(全集3 楼の上下

618頁5行目)

9の「申す」の行為の主体は朱雀院の尚侍で、行為の対象は朱雀院である。両者は、いわばかつての夫婦のような存在である。また、10の「申す」の行為の主体は朱雀院で、行為の対象は嵯峨院と、両者、親子の関係である。さらに、11の「申す」は、行為の主体が嵯峨院で、行為の対象が朱雀院といったように、両者、親子の関係である。このように、9から11の例は、いずれも、身内同士の間で交わされる私的な会話といえるものである。このような私的な会話では、行為の対象が院であっても、「奏す」「啓す」は使わず、「申す」を使って表現したと考えられる。このように、院に対する行為の主体と行為の対象の関係は身内の関係にある場合が多いのであるが、「申す」には、次のように、少数ではあるが、一見、身内の関係とはいえないような、臣下と院の関係にある例も認められる。以下、このような例について検討する。

12 「かの池の舟屋は、こたみは丈ぞ高くなりける。い

とあはれに、ただ同じやうなりや。われ見し同じほどを見し人、あらしかし。そや、かの宮内の兼覧の朝臣ありける、覚ゆや」とのたまはすれば、「さ侍り。山の木ぞ高くなりはべりける」と申す。(全集3 楼の上下

578頁5行目)

13 からうじて参りて、御階の下にて、啓せむと思ふに、楽の聲、琴の響きに、聞きつけたまふべくもあらず。しひて声の限りを出だして、「蔵人の少将藤原宣方、内裏より候」と申す。(全集3 楼の上下 598頁7行目)

12の「申す」の行為の主体は宮内卿兼覧で、行為の対象は嵯峨院である。京極邸を訪れた嵯峨院は、「われ見し同じほどを見し人、あらしかし。そや、かの宮内の兼覧の朝臣ありける」と、従者のなかに、かつて、京極邸に同行させたことのある兼覧がいることを思い出し、当時の京極邸の様子について確認する。それに対して、兼覧は、嵯峨院の述懐に同調し、感慨を述べるのである。ここでの会話は、臣下と最高上位者との間で交わされた会話ではあるが、気心の知れた者同士で行われる私的な会話であるとみることが出来る。

13の「申す」の行為の主体は蔵人少将宣方で、行為

の対象は嵯峨院と朱雀院である。藏人少将宣方の行為は、用例中に傍線で示したように、はじめは「啓す」で表現されていたが、「申す」という表現へと変わる。俊蔭娘が弾く、琴の演奏を内裏で耳にした今上帝は、藏人少将宣方に、その探索を命じる。琴の演奏が行われている京極邸に着いた宣方は、すでにその場に御幸している両院に、その到着を公的な作法に則って啓上しようとする。しかし、その声は、琴の音や、人々の喧騒にかき消されて、両院のもとには届かない。そこで、「しひて声の限りを出だして」とあるように、あらんかぎりの声を張り上げて、到着を告げるのである。宣方のこの行為は、もはや公的な作法に則ったものとはいえない。よって、「申す」という表現に変わったのではなからうか。

以上、院に対する「申す」について述べてきたことをまとめると、次のようになる。

地の文で使用された「申す」には、「啓す」や「奏す」にみられる、公的性を有するという意味特徴は全てにおいて認められない。一方、会話文で使用された「申す」の場合には、公的性を有するという意味特徴が認められる例もあるが、その場合の話し手と聞き手の関係は、いずれも親しい関係にある場合に限られることから、話し

手が聞き手を意識し、会話を和やかに進めようとするときには、空間的にも時間的にも別の場所で行われた「啓す」という公的な行為を、「申す」という表現に変えて聞き手に伝えることがあるという特徴も見出された。

このように、「申す」には、「啓す」「奏す」という語に置き換えられるような使われ方もあるものの、基本的には「申す」に公的性を有するという意味特徴は存しないし、「奏す」「啓す」といった漢語にはない、柔らかさ、穏やかさが和語の「申す」にはあつて、特に会話においては、「申す」の持つ、和語としての語感が活かされているといえる。

三―二 東宮を対象とする「申す」

最後に、東宮に対する「申す」について、院に対する場合と同じことが言えるかどうかということについて確認しておく。会話文中に使われた、東宮に対する「申す」は十一例認められるが、そのうちのいくつかについての例を挙げる。他の例も同じことがいえるので、紙面の都合上、ここでは省略したい。

1 「東宮もいとあやしと思して、『そもそもこの大将に

は、何の領^{りやう}かおはしますらむ』。親王、『かの朝臣には、頼明^{よりあきら}はしきいろを、いとやむごとなく侍り。かの大将の、九つにあたる娘は、頼明が童べにてなむはべる』と申したまふ。』(全集1 嵯峨の院 313頁10行目)

2 (仲忠)「いで、みづからのよるこびよりも、まづこれを申さむ」。(孫王君)「あいなう、すかさせたまひてそがよろこびせさせたまふらむに」など、立ちながらのたまふを、(後略) (全集2 藏開上 440頁15行目)

3 大将、「それは仰せられたるぞ。これによりて、おとどはいたく思しわづらひけり。宮も度々仰せらるめりしかば、かかる宣旨ありと申したまふめりしかど、しひて召し取りてこそ。(後略)」(全集2 藏開下 526頁9行目)

4 君、(藤壺)「御返り聞こえずとて、御使を罪したまはば、わがためにぞあらむ。罪したまはば、喜びと思はむ。さばかりだに仰せられたらば、これにまさりたらむ職^{しき}にも申しなしてむ」とのたまへば、(全集3 国譲下 245頁3行目)

1の「申す」は会話文中の例で、行為の主体は、頼明親王で、行為の対象は東宮である。話し手は、中納言正

明であり、聞き手は、左大将正頼である。話し手の中納言正明は、聞き手の左大将正頼の妻の兄の子にあたる。かなり遠い筋にはあたるが、身内といって差支えなからう。ここは、多くの殿上人、上達部も列席している、東宮御所で行われた花の宴という場での出来事であるから、ここでの「申す」は、公的性を有するという意味特徴を有していると認められる。東宮の「そもそもこの大将には、何の領かおはしますらむ」という質問を受けているので、質問に対する回答であるという意味特徴も認められる。公的性を有するという点では、「啓す」と通ずるが、「申す」は、話し手の正明が、聞き手の正頼を、身内同然の親しい関係として、和やかに会話を進めようとしたために、「啓す」ではなく「申す」で表現したと考えられる。

2の「申す」も会話文中の例で、行為の主体は左大将仲忠で、行為の対象は東宮である。話し手は、左大将仲忠で、聞き手は、藤壺付きの女房である孫王君である。仲忠が、孫王君を介して、間接的に東宮に申し上げるという場面である。仲忠と孫王君の関係は、親族関係のような血縁関係にはないが、仲忠があて宮へ求婚するときには、孫王君が当初から仲介役をしており、仲忠と孫王君との関係は、近い関係にある。東宮の眼前であるという条件

を満たしていないので、公的性を有するという意味特徴はここでの「申す」には認められない。質問に対する回答であるという意味特徴も、ここでは認められない。

3の「申す」も会話文中の例で、行為の主体は、右大臣正頼で、行為の対象は東宮である。話し手は、右大将仲忠で、聞き手は中納言涼である。話し手である仲忠と、聞き手である源涼の関係は、親族の間柄ではない。ただし、源涼は、正頼の娘婿で、仲忠は、正頼の娘である仁寿殿の女御の娘の婿であるので、正頼を中心に捉えると、親族的な近さもないわけではない。また、両者ともに、あて宮との恋に破れたという点で、心情的近さもある。この両者の心理的近さが、ここで「啓す」ではなく「申す」が使われた理由であると考ええる。なお、正頼から東宮への進言が、上達部が列席するような公的な場面で行われたか否かは特定できないが、公的性を有するという意味特徴を認め得る例である。一方、質問に対する回答であるという意味特徴は、ここでは認められない。

4の「申す」も会話文中の例で、行為の主体は藤壺で、行為の対象は東宮である。話し手は藤壺で、聞き手は蔵人これはたである。これはたは、あて宮の乳母の子どもであり、身内同士の関係にある。公的性の有無の観点か

ら言えば、藤壺から東宮への進言は、他の上達部達が列席しているような公的な場で行われるとは考えられないので、ここでの「申す」に、公的性を有するという意味特徴は認められない。ここでの「申す」に、質問に対する回答であるという意味特徴は認められない。

以上、四例を挙げたが、「申す」が会話文で使われる時には、公的性を有する意味特徴が認められる例とそうでない例とがある。ただし、院に対する「申す」と同じく、公的性を有するという意味特徴が認められるときには、話し手と聞き手の関係は、身近で親しい関係にある。例えば、次のような例がある。

○（全集2 蔵開下 605頁9行目）

行為の主体 蔵人 行為の対象 東宮
話し手 梨壺 聞き手 右大将兼雅
話し手と聞き手は、親子の関係にある。

○（全集3 国譲下 254頁5行目）

行為の主体 忠雅や兼雅、仲忠ら藤原一族
行為の対象 東宮
話し手 後の宮 聞き手 太政大臣忠雅
話し手と聞き手は、妹と兄の関係にある。

これら会話文の例に対して、地の文に使われた東宮に對する「申す」は、公的性を有するという意味特徴が認められない。最も出現例の早い、次の一例だけを示しておく。

5 東宮、「さて、残りあるやうに聞こえしは、それだになつたまうそかし。人知れず聞こえ置きたる心地すれば、さりとともなむ思ふ」とのたまへば、大將、「はなはた尊き仰せなり。いと小さくなむ侍る。少し人とならばさぶらはせむ」と申したまふ。(全集1 嵯峨の院 326頁6行目)

5の「申す」の行為の主体は、左大將正頼で、行為の對象は、東宮である。ここでは、「御物語のついでに」(全集1 325頁12行目)とあるように、東宮と正頼だけの親しい会話である。したがって、公的性の条件を満たしていない。話の内容は、正頼の娘、あて宮への求婚である。東宮との結婚は政治的な内容であるが、まだ、ここでは、あて宮の親との、内々の私的な話であることが、「申す」が使われた理由であらう。

以上、東宮に對する「申す」についてみてきたが、「啓

す」との意味の違いは、「申す」が公的性という意味特徴を有しない点にあるといえよう。ただ、個別の用例を見れば、会話文では、公的な行為を表す「申す」の例も認められ、「啓す」と言い換えられるようにもみえる。しかしながら、話し手が聞き手を身内と判断し、私的で和やかに話を進めようと意識した場合には、「啓す」ではなく「申す」を使ったと考えられる。

なお、これらの東宮に對する「申す」の特徴は、院に對する「申す」の特徴と同じである。

おわりに

以上、『宇津保物語』を對象に、「奏す」「啓す」の意味について検討してきた。『宇津保物語』では、「奏す」にも「啓す」にも「申す」にも院を對象にする例が存し、また、「奏す」にも「啓す」にも「申す」にも東宮を對象にする例が存する。これらのうち、院を對象とする「啓す」や、東宮を對象とする「奏す」については、誤った使われ方として注釈されることが多かった。

本稿では、これら『宇津保物語』の「奏す」「啓す」に、意味用法上の差は認められないのかどうか、検討を行った。その結果、『宇津保物語』において、「奏す」「啓す」

「申す」は、それぞれ意味を異にして使い分けられていることが分かった。

「奏す」「啓す」「申す」それぞれについて、公的性を有するかどうか、質問に対する回答であるか否かという二つの意味特徴の面から、これら三語の意味の違いを検討した結果、次のような結果となった。

1 院、東宮、后宮を対象とする「啓す」には、すべて質問に対する回答であるという意味特徴と公的性を有するという意味特徴が認められた。

2 院や東宮を対象にする「奏す」には、公的性を有するという意味特徴は認められるが、質問に対する回答であるという意味特徴は認められない。また、話の内容については、「啓す」は「奏す」に比べて、私的な内容が中心であった。

3 「申す」は、院や東宮に限らず、大臣など幅広い上位者を対象に取るという点で、「奏す」「啓す」と、意味上の相違が認められる。院や東宮を対象とする場合には、地の文においては公的性を有するという意味特徴は認められない。会話文において、公的性を有する例も存するが、その場合、話し手と聞き手は身内の関係

である。

以上の結果から、『宇津保物語』の「奏す」「啓す」「申す」は、院、東宮、后宮といった対象を同じくする場合でも、それぞれ異なった意味で使われていると結論付けられる。このうち特に、「奏す」「啓す」の意味の違いは、「奏す」は帝や院に、「啓す」は東宮や三宮にという、対象の違いが本来的にあるのではなく、質問に対する回答であるという意味特徴の有無が「奏す」「啓す」の意味を分けると言ってよいのである。質問に対する回答であるという意味特徴が、「奏す」「啓す」の、弁別の意味特徴としてあり、この意味の差が、「奏す」「啓す」の対象の違いとなって表れると考えられるのである。すなわち、「啓す」が東宮や三宮を対象とするようにみえるのは、東宮や三宮を対象にする場合には、臣下が質問に答えるという場面が多いためであろうと推されるし、一方、「奏す」が帝や院を対象とするようにみえるのは、臣下が質問に答えて発言するという場面が、東宮や三宮に比べて少ないためであろうと推されるのである。総じて、「奏す」「啓す」の意味と「申す」の意味の違いは、漢語と和語の違いをよく示しているといえる。また、「奏す」と「啓す」

の意味の違いは、「奏」「啓」という漢字の中国における字義の差に起因すると考えられる。

本稿では、『宇津保物語』は、「奏す」「啓す」の用法上の誤りの多い作品ではなく、「奏す」「啓す」の本来の意味の違いをよく示している作品であると結論付けたい。

表1 「奏す」の公的性の条件の有無

用例番号	条件A	条件B	条件C	条件D
1	○(嵯峨院)	○	○院の御所	○左大将正頼
2	○(嵯峨院)	○	○院の御所	○紀伊守
3a	○(嵯峨院)	○※1	○院の御所	○藏人仲頼
3b	○(嵯峨院)	○※1	○院の御所	○藏人仲頼
3c	○(嵯峨院)	○※1	○院の御所	○藏人仲頼
4	○(嵯峨院)	○	○院の御所	○藏人仲頼
5a	○(嵯峨院)	○	○院の御所	○侍従仲忠ら
5b	○(嵯峨院)	○※1	○御所 (花の宴)	○右大臣忠雅
6	○(嵯峨院)	○※2	○吹上御所	○藏人
7	○(嵯峨院)	○※2	○吹上御所	○左大将正頼
8a	○(嵯峨院)	○※2	○吹上御所	○左大将正頼
8b	○(嵯峨院)	○※2	○吹上御所	○左大将正頼

8c	○(嵯峨院)	○※2	○吹上御所	○法師忠こそ
8d	○(嵯峨院)	○※2	○吹上御所	○法師忠こそ
9	○(嵯峨院)	○※2	○吹上御所	○藏人
10a	○(嵯峨院)	○※2	○吹上御所	○中将涼
10b	○(嵯峨院)	○※2	○吹上御所	○中将涼
11	○(朱雀院)	○	○院の御所	○藏人
12	○(朱雀院)	○	○院の御所	○右大将仲忠
13	○(嵯峨院)	○	○院の御所	○藏人

※1 「上達部、親王^{みこ}たち、残りなく参りたまひて御遊びしたまふ」(全集1 513頁5行目)とあることから条件Bを満たす。
 ※2 「かくて、嵯峨の院の親王^{みこ}たち、殿上人も、才^{ざい}あり、かたちあるは、みな出で立つ」(全集1 515頁9行目)とあることから条件Bを満たす。

1 日本国語大辞典第二版 2000～2002 小学館
 拙稿『宇津保物語』における「奏す」「啓す」の特殊用法
 (1)「奏す」と「申す」の意味的關係―〔広島女学院大
 学 日本文学』22号 2012年7月〕
 3 「うつほ物語」(1999～2002 中野幸一校注・訳 『新編日本古典
 文学全集』14～16 小学館)
 4 以下、論文中の語の提示は、原則として用例中の活用とは関
 係なく「奏す」「啓す」のように終止形で示す。